

Aug.14,1968。山本小屋周辺的美ヶ原草原には黄色い花が一群の花畑を形成した場所があって、クジャクチョウやシータテハが訪れていて楽しむ。車山方面行きのバスを待つあいだにも何かいないかと注意していたら、かなり下方のゴミ置き場となった平らな部分を黒っぽいチョウが滑空している。もしかして、と駆け下りてみるとキベリタテハだ。まさに感激の出会い。ゆっくり旋回しているところをサッと一振り、キャッチできたもので、記念すべき初採集個体である。



Aug.14,1968 美ヶ原山本小屋 クジャクチョウ



Aug. 14, 1968 美ヶ原 初採集

Aug.29,1977。新鹿沢温泉：朝日がまぶしい一日のはじまりだ。ところが8時を過ぎるとつくき雲がではじめる。雲の切れ目からときおりのぞく太陽。そのときばかりは白樺の白い樹肌と葉っぱの緑がひとときわ明るく輝き、キベリタテハがいまにもすべるように舞い降りてくるのでは、と期待させる。シータテハがあらわれてスイスイと飛び去るが、11時を過ぎてもキベリタテハは1頭も姿を見せない。「からまつ荘」側の白樺林からは子供たちのキャーキャーという嬌声が聞こえてくる。シーソーを大きくゆらしたスリル感を楽しんでいるようだ。声がしなくなったと思えばウサギ小屋のまえで草を食べさせている。テニスコートがある広場方面へと二人を誘って歩いてみる。途中の水場に降りてトンボ採りをさせてやる。「ここは純ちゃんが飛び降りて泥にはまりしかられたところ」と娘が昨年家族で訪れたときの失敗を思い出している。スジボソヤマキチョウ1♂を採り、さらにアザミ花上で求蜜する光景をカメラに収めて「からまつ荘」にもどる。はるばるやってきてキベリタテハとは出会えないまま帰るしかないのか。弁当の昼食をすませ13時のバスで地蔵峠に向う。

車窓からは何かチョウがいらないかと注意を怠らない。やがて、峠に近いカーブにさしかかった路面に羽をひらいてとまる黒いチョウの姿が目飛び込む。一瞬にして認めた黄色い縁どりとピロード調の黒紫褐色、そして特徴的なブルーの斑紋。キベリタテハだ。惜しいかなバスは止まってくれない。無情にもキベリタテハは遠ざかるのみ。いいや、峠からここまで歩いてみてもどろう、そう言い聞かす。やがてバスは昨日ベニヒカゲと戯れた草原横にさしかかる。すると、何とここにもキベリタテハがいるではないか。思わず前の座席の造成にも知らせて喜ぶ。峠でバスを降りるや一目散にアスファルト道路を温泉側へと駆け下りる。ところがバスから見えた位置にキベリタテハの姿はない。どこかへ飛んでいってしまったのか。道路近辺、範囲を広げて調べてみる。すると、いるいる。アスファルト路面から外れた赤土の上にベッタリと羽を広げるキベリタテハが見つかる。V字開翅ではないので路面の水を吸っているのではなさそうだが、すぐに飛び去る気配はない。グリーンネットをゆっくりかぶせる。びっくりしてはばたくキベリタテハ。少し翅が傷んだ個体だが貴重な記念品として三角紙に収める。これで気をよくしてベニヒカゲをカメラで追う。ふと目に入る大きい黒。再びキベリタテハだ。ビールの空き缶が2個ころがるその横に、飛来したばかりのようだ。この時点ではビールの発酵臭に惹かれてきたという考えはなく、チョウが足場を決める間にこちら足場を整え、すばやくネットをかぶせ込み、ネットの先の方

へ追い込むようにしてサッと一振り。そのとき、そばでずっと見守っていた浩成が「逃げた！」と叫ぶ。そのとおりネットの中にキベリタテハの姿はない。何という不覚。いったいどこに逃げた？ 呆然とする筆者に救いの声がかかる。「背中だよ。パパの背中にとまっているよ」。普通、驚いたチョウは一目散に遠く飛び去るのに、今はなんと驚かせた当事者の背中にとどまっているという。身体を大きく動かさないように注意しながら、浩成にネットを静かに手渡し「ゆっくりまっすぐかぶせて」と指示。浩成は実に慎重にうまくやってくれ、振り向くとちゃんと二つ折りにしたネットの袋の方で完璧に新鮮なキベリタテハがバサバサともがいている（本個体は標本撮影時のゆがみではなく実際に右の翅が前後翅ともにやや小さい異常型）。「よくやってくれた、ありがとう」浩成のうれしそうな笑顔。すばらしい思い出をつくってくれたこのキベリタテハはなぜ一気に遠く飛び去らなかったのだろうか。いきなりネットをかぶせられたショックは大きかったはず。そこで考えられるのがビールの空き缶の影響だ。その発酵臭がよほど気に入って、離れがたかった可能性はある。あるいは、当方が気づかないあいだにすでにビールを少々賞味して、ちょっと酔っ払っていたのかもしれない。そんな考察をしている最中、またしても新たなキベリタテハが滑空しながら現れて、ビールの空き缶付近に着地する。これは間違いなく、発酵臭の誘引効果だ。期せずして2頭目の新鮮キベリタテハをゲットする。このときの経験をもとに、後年、塩山市の上日川林道であえて缶ビールを買い込んで、堰堤近くの川原にふりまいてみたことがあるが、そのときにはキベリタテハをおびき寄せることはできていない。



Aug. 29, 1977
長野地蔵峠
leg. Hiroaki Shimazaki



Aug. 29, 1977 長野地蔵峠

Aug.28,2005。しらびそ高原：この日は朝からすこぶるいい天気、やがて道路脇に見えてくるコンクリートの防護壁にタテハチョウの仲間が遊んでいる環境となる。エルタテハと思われるチョウが目に入った場所で車をとめて降り立つと、そこはカーブを曲がりきった右手に大きく開



Aug. 28, 2005 しらびそ高原

けた崖があり、左山側にはコンクリートの防護壁が数百メートルにわたってつづいている、キベリタテハが現れるには格好の場所なのでしばらく待機することにする。カーブとなった場所奥手には適度な草原が広がり、林縁沿いに大きなミヤマカラスアゲハが蝶道を形成してゆったりきたりしている。直感どおり、ここはチョウが次々と遊びにくる絶好の場所で、開田高原とはちがって新鮮なキベリタテハがどこからともなく滑空しながら現れるし、クジャクチョウやエルタテハ、キタテハも防護壁のわずかな水分を求めて訪れ、昨日

の林道で出会えた想定外のツマジロウラジャノメも姿を見せる。ここでは発生ピークが開田高原とは逆転しているようで、キベリタテハは新鮮なのにツマジロウラジャノメは新鮮体が少ない。崖の斜面岩陰に生えるヌカボと思われる食草に盛んに産卵活動をするメスの様子をビデオカメラに記録する。

Aug.19,2008。蓼科高原：以前にキベリタテハを目撃できた、峠を越えた先にある白駒林道をめざす。2127m という国道最高地点の麦草峠を越えて走り抜けようとした左手広場に白い乗用

車が止まっており、その横を通り過ぎる瞬間に自動車の周りを飛ぶキベリタテハが目に入る。妻はとっさに急停車してくれ、ネット片手にキベリの動きに注視する。キベリタテハはシルバーなど自動車のボディー反射光に惹かれて飛来することは月夜沢でも経験済みで、今回は白い自動車だったようだが、近くに広がるダケカンバ林へと飛び去る可能性も考えられる飛翔を見せながら、幸いなことに広場のはずれにある草むらの空き地に羽を広げて静止姿勢をとる。そっと近づいてゆっくりと上からネットをかぶせると、チョウは少しもさわがず悠然と羽をひろげたままとどまっている。吸水とかの状態ならともかく、ただ羽を広げてやすんでいるだけのところに網をかぶせられて驚かないとは、ずいぶん神経のずぶといチョウだ。実は、月夜沢で確保した新鮮ピカピカの個体が、三角紙内でおむつ対策をとっていなかったばかりに、チョウが放つ糞汁がきれいな鱗粉を汚してしまうという、予想はしていながら対策が手遅れとなった苦い経験をしたばかりで、この麦草峠産個体にはお尻の両側をパラフィン紙で挟み込むという工夫をして三角紙に収める。



Aug. 19, 2008 麦草峠

Aug.22,2008。和田峠を經由し、三峰展望台を右にやりすごして扉峠が近づいたあたりで、道路右が深い谷となって樹林帯がその斜面を覆い、左側にはコンクリート防護壁が連なる環境となると、いきなりキベリタテハが飛び出てくる。2,3頭がひらひらと舞う。写真を撮るには背景に面白みがないがビデオ記録だけはとっておく（右の画像はビデオ記録から選別した静止画像）。

次いで新鮮個体を選んでネットを振る。通常、壁面で吸水中のところにネットを横からかぶせるのが確実な捕獲法であるが、この日は、水平に飛行するところをスーッと横払いでネットインできる個体も少なくない。こういうキベリタテハが好みそうな場所が道路沿いに何箇所もあり、妻には



Aug. 22, 2008 扉峠

峠の駐車場まで先に行ってもらって、しばらく歩いてみることにする。実は峠はそう遠くないはずと考えての選択だったのだが、意外に相当歩き続けてもそこに至る気配はない。そのうち、妻の判断で迎えにきてくれることを期待しようと、とにかく進むうち、右手に平坦な林が展開するところに車を入れて待つ妻の姿が目に入る。妻も、峠までまだかなりの距離があることを知って、峠から戻ってきてくれ、その途中、周辺を複数のキベリタテハが飛んでいて車も止められる格好の場所を見つけたのだという。この場所で、ビデオカメラも駆使して存分にキベリタテハと戯れ、最後に、峠駐車場近辺でもキベリタテハを堪能して 11 時頃ようやく帰路に着く。カーナビは高遠経由でなく、塩尻経由を指示して来るのですなおに従って進む。